

日本神話「いなばのしろうさぎ」を題材とした絵本の対照比較

川 俣 沙 織

A comparison of picture books based on the Japanese myth “Inaba no ShiroUsagi (Hare of Inaba)”

Saori Kawamata

1. はじめに

2019年度現在、小学校において使用されている国語科教科書すべてに日本神話を題材とする物語が掲載されているが、検定教科書を作成している全5社のうち4社が「いなばのしろうさぎ」を、残る1社が「やまたのおろち」を採用している。川俣(2019)において、これら現行の小学校国語科教科書に採用されている「いなばのしろうさぎ」4作品、そして「やまたのおろち」1作品と原典である『古事記』¹を比較し、それぞれの再話作品としての特徴を明らかにしたが、本稿では、「いなばのしろうさぎ」を題材とした絵本について検討したい。

現行の幼稚園教育要領には、「教師が指導を行う際に考慮する」べき「ねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿」である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のひとつとして「先生や友達と心を通わせる中で、絵本（下線は筆者による。以下同様）や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようにな

る」と示されており、同年改訂された保育所保育指針にも「保育士等が指導を行う際に考慮する」べき「ねらい及び内容に基づく保育活動全体を通して資質・能力が育まれている子どもの小学校就学時の具体的な姿」のひとつとして「保育士等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる」と示されている。小学校就学前の幼児期に触れる可能性の高い絵本において「いなばのしろうさぎ」がどのように再話されているのか、それぞれの特徴を探る。なお、紙幅の関係上、「やまたのおろち」を題材とする絵本については別稿にて扱うこととする。

2019年現在入手可能な「いなばのしろうさぎ」を題材とする絵本²は表1の通りである。

以下、弁別のため7社それぞれの「いなばのしろうさぎ」を題材とする絵本を小学館版「いなばのしろうさぎ」（あるいは小学館版）、いずみ書房版「いなばのしろうさぎ」（あるいはいずみ書房版）、文芸社版「いなばのしろうさぎ」（あるいは文芸社版）、金の星社版「いなばのしろうさぎ」（あるいは金の星版）、佼成出版社版「いな

表1 「いなばのしろうさぎ」を題材とした現在入手可能な絵本

書名	著者名	発行年	出版社
日本の神話 古事記えほん【四】 いなばの白うさぎ～オオナムヂとヤガミヒメ～	三浦 佑之 監 荻原 規子 文 山村 浩二 絵	2016年	小学館
改訂新版 せかい童話図書館 9 いなばのしろうさぎ	秋 晴二 著 高山 洋 著	2014年	いずみ書房
因幡の白うさぎ	伊達 恵美子 著	2012年	文芸社
いなばのしろうさぎ	いもと ようこ 文・絵	2010年	金の星社
十二支むかしむかし いなばの白ウサギ	谷 真介 文 赤坂 三好 絵	2006年	佼成出版社
いなばの白うさぎ	照沼 まりえ 文 四分一 節子 画	2002年	永岡書店
日本の神話 第四巻 いなばのしろうさぎ	赤羽 末吉 絵 舟崎 克彦 文	1995年 (1984年)	あかね書房

ばのしろうさぎ」(あるいは佼成出版社版)、永岡書店版「いなばのしろうさぎ」(あるいは永岡書店版)、あかね書房版「いなばのしろうさぎ」(あるいはあかね書房版)と呼ぶこととする。なお、小学館版「いなばのしろうさぎ」は「日本の神話 古事記えほん」シリーズ全5巻のうち第4巻であり、『古事記』の研究者である三浦祐之が監修を行っている。また、あかね書房版「いなばのしろうさぎ」は、「日本の神話」シリーズ全6巻のうち第4巻であり、本シリーズは1983年から1987年にかけてトモ企画により出版されたものの復刊である。第4巻の本作の初版は1984年である。いずみ書房版は「改訂新版 せかい童話図書館」シリーズ全40巻のうち第9巻であり、佼成出版社版は「十二支むかしむかしシリーズ」全12巻のうち第4巻である。

2. 「いなばのしろうさぎ」を題材とする絵本7作品それぞれの再話作品としての特徴

本節では「いなばのしろうさぎ」を題材とする絵本7作品それぞれの再話作品としての特徴を探ることとする。まず、7作品すべてに共通する表記上あるいは表現上の特徴を整理しておく。本稿で対象とする作品はすべて絵本であり、その主な対象は幼児期から学童期の児童である。幼児期は養育者や保育者といった大人による読み聞かせを楽しむことが多いが、学童期以降は子ども自身が読書として一人で絵本を読むことも徐々に増えていく。そのため、多くの絵本には「漢字にはルビを振り、多くはひらがなで表記する」「(特に全文をひらがなで表記する場合は)分かち書きをする」という表記上の配慮が施されている。では本稿で扱う7作品はどうかというと、いずみ書房版および金の星社版は数のみを漢字で表記し、それ以外はすべてひらがなで記している。また、読みやすいよう「分かち書き」がなされている。小学館版、文芸社版、佼成出版社版、永岡書店版、あかね書房版は漢字かな交じり文で表記されているが、そのうち文芸社版、佼成出版社版および永岡書店版で使用されている漢字は平易で、使用頻度も低い。また、この三者は分かち書きされている。例えば、物語冒頭の一文を比較す

ると、表2の通りとなる。

文芸社版、佼成出版社版、永岡書店版において使用されている漢字は、難解なものは固有名詞に限られており、それ以外は平易なものに留められている。例えば文芸社版で使用されている固有名詞以外の漢字である「海」、「島」、「白」はそれぞれ小学校第2学年、小学校第3学年、小学校第1学年で学習する漢字であり、佼成出版社版、永岡書店版も同様に、小学校第1学年および第2学年で学習する漢字が主に使用されている。一方、小学館版およびあかね書房版は分かち書きをしておらず、使用されている漢字も小学校第4学年以降に学習するものも多い。さらにあかね書房版は、物語冒頭の一文を見ても「あらくれもの」「聞こえた」「こよなく」「気立てのよい」といった語句が使用されており、学童期の児童にとって、まして幼児期の子どもにとっては極めて難解であると言えよう。

このことから、表記上あるいは表現上の特徴から考えると、いずみ書房版および金の星社版は幼児期の子どもの受容に適しており、文芸社版、佼成出版社版および永岡書店版は、幼児期から学童期のはじめである小学校低学年、あるいは中学年までを含む児童の受容に適していると言えるだろう。小学館版は使用されている漢字こそ平易なものばかりではないが、文表現は易しいため、一人で楽しむ読書としてであれば小学校中学年以降が対象となると考えられるが、大人による読み聞かせならば幼児期の子どもも楽しめるだろう。あかね書房版は、一人で楽しむ読書としても、大人による読み聞かせの受容としても、小学校中学年以降の児童が主な対象となると思われる。

上記を前提とし、以降、原典の『古事記』と「いなばのしろうさぎ」を題材とした絵本を川俣(2019)同様、「登場人物の呼称と地名」「物語展開」「登場人物の個性や心理の起伏」の3つの観点において比較し、それぞれの再話作品としての特徴を明らかにしたい。

<観点1 登場人物の呼称と地名>

各絵本における登場人物の呼称と地名の表記を比較したところ、表3の通りとなった。

表2 漢字かな交じり文で表記されている5作品の物語冒頭の一文 比較

出版社	物語冒頭の一文
小学館	やまたのおろちを退治した出雲の国の神、ササノオの子孫にあたる、オオクニヌシのお話です。
文芸社	むかし むかし 海にうかぶ 濠岐の島に いっぴきの 白うさぎが いました。
佼成出版社	むかし、むかし、因幡の国(鳥取県)の うみの ちかくに ある 竹林に、たくさんの ウサギが、すんでいました。
永岡書店	ずっと、ずっと むかし。オオクニヌシという 神さまが、いなばのくにを たび していました。
あかね書房	あらくれもので聞こえた須佐之男の命の子孫にもこよなく気立てのよい神がいた。

本文中に原文と一致する呼称あるいは地名⁴が確認できた場合は○を記し、その下に本文中の実際の表記を付した。本文中に原文と一致する呼称あるいは地名が確認できなかった場合は×を記し、原文の表記とは一致しないものの、原文における呼称あるいは地名に相当する記述が認められた場合は×の下に本文中の実際の表記を付した。

まず、登場人物の呼称について述べる。後のオオクニヌシであるオオナムチの呼称は小学館版のみが「オオナムチ」を主に採用⁵しており、他6社はすべて「オオクニヌシ」、あるいはそれに類する呼称を採っている。オオナムチ（オオクニヌシ）の兄神にあたる八十神についてはあかね書房版のみが「兄弟たち」と併せて「八十神」の呼称を使用しており、他6社はすべて固有の呼称は使用していない。ヤガミヒメについては小学館版、文芸社版、永岡書店版、あかね書房版において「ヤガミヒメ」との呼称が用いられており、いづみ書房のみ「やかみひめ」とひらがなかつ清音の表記が採られている。なお、金の星社版および佼成出版社版はヤガミヒメの存在そのものが物語には登場せず、オオナムチ（オオクニヌシ）と八十神の旅の目的も示されていない。兎については小学館版、いづみ書房版、永岡書店版において「うさぎ」と併せ「しろうさぎ」が採用されており、文芸社版および金の星社版は一貫して「しろうさぎ」の表記を、佼成出版社版およびあかね書房は「うさぎ」の表記を採っている。ワニについてはいづみ書房版、文芸社版が原典通り「ワニ」と表記しており、他5社はすべて「サメ」と表記している。なお、いづみ書房版、文芸社版において

は「ワニ」はその表記の通り、爬虫類のワニとして描かれている。

次に地名について述べる。小学館版、永岡書店版、あかね書房版においては原文に出現した地名がすべて記されていた。いづみ書房版においては「いなばのくに」「いづものくに」、文芸社版においては「因幡の国」「淤岐の島」、金の星社版においては「おきのしま」、佼成出版社版においては「因幡の国（鳥取県）」との表記が確認された。佼成出版社版ではさらに「おきにある小さな島」との表記があったが、この「おき」は「沖」と解すべきであり、特定の地名を指すものでないと判断される。

以上を整理すると、登場人物の呼称と地名の表記においては、「ワニ」以外のすべての登場人物の呼称とすべての地名が確認できるあかね書房版が最も原典の本文に近い再話であると評価できる。次に原典に近いのが「八十神」「ワニ」以外のすべての登場人物の呼称とすべての地名が確認できる小学館版および永岡書店版であり、「八十神」以外のすべての登場人物の呼称と4箇所のうち半数の2箇所の地名を記している一方、「ワニ」を爬虫類として描写しているいづみ書房版および文芸社版がこれに続く。「八十神」「ワニ」の呼称と4箇所中3箇所の地名が表記されておらず、「ヤガミヒメ」に至っては存在そのものが描かれていない金の星社版および佼成出版社版が、7作品の中では最も原典から離れた再話であると言えるだろう。

<観点2 物語展開>

次に、物語の展開において比較する。『古事記』原文

表3 原典と各社「いなばのしろうさぎ」の対照比較（登場人物の呼称および地名）

	小学館	いづみ書房	文芸社	金の星社	佼成出版社	永岡書店	あかね書房	
登場人物の呼称	オオナムチ (オオクニヌシ)	○ (オオクニヌシ, オオナムチ)	○ (おおくにぬしのみこと, みこと)	○ (オオクニヌシ, 大国主命)	○ (「おおくにぬしのみこと」)	○ (オオクニヌシノ ミコト)	○ (オオクニヌシ)	○ (大国主の命, 大国主)
	八十神	× (おおぜいの兄神)	× (にいさんたち, にいさんのかみさま またち)	× (たくさんの神さま またち, 兄神たち)	× (いじわるなかみ さま)	× (わかい かみさ またち)	× (おにいさんたち)	○ (八十神, 兄弟たち)
	ヤガミヒメ	○ (ヤガミヒメ)	○ (やかみひめ)	○ (ヤガミ姫)	×	×	○ (ヤガミヒメ)	○ (八上姫)
	兎	○ (うさぎ, 白うさぎ)	○ (うさぎ, しろうさぎ)	○ (白うさぎ)	○ (しろうさぎ)	○ (ウサギ)	○ (うさぎ, 白うさぎ)	○ (うさぎ)
	ワニ	×	○ (ワニ)	○ (ワニ)	×	×	×	×
地名	稲羽	○ (稲羽の国)	○ (いなばのくに)	○ (因幡の国)	×	○ (因幡の国(鳥取県))	○ (いなばのくに)	○ (因幡の国)
	淤岐島	○ (おきの島)	×	○ (淤岐の島)	○ (おきのしま)	×	○ (おきのしま)	○ (おきの島)
	出雲	○ (出雲の国)	○ (いづものくに)	×	×	×	○ (いづものくに)	○ (出雲の国)
	気多	○ (気多のみさき)	×	×	×	×	○ (けたのみさき)	○ (気多のみさき)

における因幡之素菟説話に相当する箇所は、物語の展開によって「①オオナムチ（オオクニヌシ）・八十神の登場」「②旅の目的（ヤガミヒメとの結婚）の提示」「③八十神による従者のようなオオナムチ（オオクニヌシ）の扱い」「④八十神と兎の出会い」「⑤八十神による兎への虚偽の助言」「⑥オオナムチ（オオクニヌシ）と兎の出会い」「⑦兎によるオオナムチ（オオクニヌシ）への経緯の説明」「⑧オオナムチ（オオクニヌシ）による兎への助言」「⑨兎の回復」「⑩兎による予言」の10の場面に整理することができる。さらにその後、「⑪ヤガミヒメによるオオナムチ（オオクニヌシ）との婚姻宣言」「⑫八十神によるオオナムチ（オオクニヌシ）への迫害」の展開の後、オオナムチ（オオクニヌシ）の根の国訪問へと続くが、以上12の場面に相当する記述が各絵本の本文に存在するか否かを整理すると表4の通りとなる。

原文と大きく変わらない記述が物語展開の同一箇所に確認できる場合はその番号を記し、確認できない場合は番号の前に×を記した。なお、原文と大きく変わらない記述が原文とは異なる箇所に記されていた場合はその箇所に当該番号を記すこととし、原文の物語展開と同一の箇所に確認できるものの一部、あるいは大部分が原文とは異なる内容に改変されている場合は番号の前に△を付した。

まず、すべての絵本において共通して確認できたのは、物語の展開部である「④八十神と兎の出会い」「⑤八十神による兎への虚偽の助言」「⑥オオナムチ（オオクニヌシ）と兎の出会い」「⑦兎によるオオナムチ（オオクニヌシ）への経緯の説明」「⑧オオナムチ（オオクニヌシ）による兎への助言」「⑨兎の回復」、以上6つの場面であった。ただし、文芸社版、佼成出版社版、金の星社版においては「④八十神と兎の出会い」「⑤八十神による兎への虚偽の助言」「⑥オオナムチ（オオクニヌシ）と兎の出会い」の場面の前に「⑦兎によるオオナム

チ（オオクニヌシ）への経緯の説明」に相当する記述がなされており、その描写も兎による語りの形式ではなく、三人称視点による記述に改変されている。さらに、佼成出版社版および金の星社版には「①オオナムチ（オオクニヌシ）・八十神の登場」「②旅の目的（ヤガミヒメとの結婚）の提示」「③八十神による従者のようなオオナムチ（オオクニヌシ）の扱い」の3場面、そして「⑩兎による予言」「⑪ヤガミヒメによるオオナムチ（オオクニヌシ）との婚姻宣言」「⑫八十神によるオオナムチ（オオクニヌシ）への迫害」の3場面に相当する場面が存在しない。以下、各社「いなばのしろうさぎ」の物語展開について詳述していく。

小学館版は、「①オオナムチ（オオクニヌシ）・八十神の登場」から「⑫八十神によるオオナムチ（オオクニヌシ）への迫害」に至るまで、すべて原典同様に物語が展開しており、また、「日本の神話 古事記えほん」シリーズ全5巻のうち第4巻であることから、第3巻である『やまたのおろち～スサノオとクシナダヒメ～』を承け、冒頭、「やまたのおろちを退治した出雲の国の神、スサノオの子孫にあたる、オオクニヌシのお話です。」という一文によって物語が始まっている。さらに、物語の結末部分の「このあとオオナムチは、根の国堅州の国で、オオクニヌシになる力を手に入れるのです。けれども、それには、さまざまな危険が待っているのです。」との記述によって、第5巻である『国づくりのはなし～オオクニヌシとスクナビコナ～』へと物語が続いていくことが示されている。

いづみ書房版においては、「①オオナムチ（オオクニヌシ）・八十神の登場」から「⑪ヤガミヒメによるオオナムチ（オオクニヌシ）との婚姻宣言」までが描かれており、「⑫八十神によるオオナムチ（オオクニヌシ）への迫害」については語られていない。なお、いづみ書房版の結末部分には「あるとき、みことが やかみひめに

表4 原典と各社「いなばのしろうさぎ」の対照比較（物語展開）

原典の物語構成	小学館	いづみ書房	文芸社	金の星社	佼成出版社	永岡書店	あかね書房
①オオナムチ（オオクニヌシ）・八十神の登場	①	①	△⑦	×①	×①	①	①
②旅の目的（ヤガミヒメとの結婚）の提示	②	②	④	×②	×②	②	②
③八十神による従者のようなオオナムチ（オオクニヌシ）の扱い	③	③	⑤	×③	×③	③	③
④八十神と兎の出会い	④	④	⑥	△⑦	△⑦	④	④
⑤八十神による兎への虚偽の助言（虚偽）	⑤	⑤	⑧	④	④	⑤	⑤
⑥オオナムチ（オオクニヌシ）と兎の出会い	⑥	⑥	⑨	⑤	⑤	⑥	⑥
⑦兎による経緯の説明	⑦	⑦	①	⑥	⑥	⑦	⑦
⑧オオナムチ（オオクニヌシ）による兎への助言	⑧	⑧	②	⑧	⑧	⑧	⑧
⑨兎の回復	⑨	⑨	③	⑨	⑨	⑨	⑨
⑩兎による予言	⑩	⑩	△⑩	×⑩	×⑩	⑩	⑩
⑪ヤガミヒメによるオオナムチ（オオクニヌシ）との婚姻宣言	⑪	△⑪	△⑪	×⑪	×⑪	×⑪	⑪
⑫八十神によるオオナムチ（オオクニヌシ）への迫害	⑫	×⑫	×⑫	×⑫	×⑫	×⑫	⑫

たずねました。『はまべで、わたしが たすけた しろうさぎは、ほんとうは あなただったのではないのかね?』やかみひめは、ただ だまって、やさしく ほほえんでいました。」と記されており、兎とヤガミヒメが同一の存在であることを匂わせる、原典にも他の絵本にもない、独自の展開となっている。また、「⑦兎によるオオナムチ（オオクニヌシ）への経緯の説明」の場面において「ところが あるとき、きゆうに おおみずがでて、わたしは、あつというまに うみに おしながされて しまったのです。(中略)……ようやく、ある しまへ ついたのです。」とあり、因幡の国で暮らしていた兎が大水のために沖ノ島に流され、望郷の思いからワニを騙すに至ったと描写されているが、これも原典においては確認できない⁶。

文芸社版の物語の構成は、原典とは大きく異なるものとなっている。前述の通り、「⑦兎によるオオナムチ（オオクニヌシ）への経緯の説明」に相当する記述が三人称視点によって冒頭に記述されており、続いて「④八十神と兎の出会い」「⑤八十神による兎への虚偽の助言」「⑥オオナムチ（オオクニヌシ）と兎の出会い」が、次に「⑧オオナムチ（オオクニヌシ）による兎への助言」「⑨兎の回復」が描かれ、さらに「①オオナムチ（オオクニヌシ）・八十神の登場」「②旅の目的（ヤガミヒメとの結婚）の提示」「③八十神による従者のようなオオナムチ（オオクニヌシ）の扱い」が語られたのち、最後に「⑩兎による予言」「⑪ヤガミヒメによるオオナムチ（オオクニヌシ）との婚姻宣言」によって物語が閉じられている。なお、「⑩兎による予言」「⑪ヤガミヒメによるオオナムチ（オオクニヌシ）との婚姻宣言」の場面において、いずみ書房版同様、独自の展開を見せている。文芸社版では、ヤガミヒメに求婚するつもりがなかったオオナムチ（オオクニヌシ）に対し、兎が「あの兄神さまたちは、けっしてヤガミ姫さまと結婚できません。にもつもちでもあなたさまが結婚できます」と予言した上で、「ヤガミヒメへ求婚を」「考えてみてください!」「ヤガミ姫さまは、あなたさまを待っていらっしやいます。きっと、いらしてくださいね」と言い残し、ヤガミヒメの邸へ先回りしそれまでの経緯をすべてヒメへ注進するという展開となっているのである。いずみ書房版の物語の結末部分の描写同様、この展開も原典においては確認できない。

金の星社版は、前述の通り「④八十神と兎の出会い」「⑤八十神による兎への虚偽の助言」「⑥オオナムチ（オオクニヌシ）と兎の出会い」の場面の前に「⑦兎によるオオナムチ（オオクニヌシ）への経緯の説明」に相当する記述がなされており、その描写も兎による語りの形式ではなく、三人称視点による記述に改変されている。さ

らに、「①オオナムチ（オオクニヌシ）・八十神の登場」「②旅の目的（ヤガミヒメとの結婚）の提示」「③八十神による従者のようなオオナムチ（オオクニヌシ）の扱い」の3場面、そして「⑩兎による予言」「⑪ヤガミヒメによるオオナムチ（オオクニヌシ）との婚姻宣言」「⑫八十神によるオオナムチ（オオクニヌシ）への迫害」の3場面に相当する場面が存在しない。オオナムチ（オオクニヌシ）ではなく、幼児・児童にとって親しみやすい兎を中心に物語展開が再構成されたものと考えられる。また、金の星社版は、兎がワニの背中を渡る場面の描写において、兎がワニの背中の上を飛び移り始める場面から皮を剥がされる場面に至るまでに10頁（見開きにして5場面）も割いている⁷点も特徴的である。そのうちの2頁（見開きにして4場面目）は「びよん びよん びよん びよん……」「びよん びよん びよん びよん……」と兎の跳躍する擬音語が繰り返し記されている。物語の山場であるこの一連の場面に大きく紙面を割くことにより、他作品にはない臨場感が生まれている。

佼成出版社版も金の星社版同様に兎を中心に物語が展開しているが、結末部分が異なる。他の絵本の多くがオオナムチ（オオクニヌシ）の後の統治者としての成功を結末として描いているのに対し、佼成出版社版の結末部分には「そのご、ウサギは オオクニヌシノミコトにおしえられたことを、にんげんたちにも つたえました。ガマのほのかふんは、きずばかりではなく、ひふびょうや、子どもたちの やまいにも、よく ききます。それを した 村人たちは、ウサギにかんしゃしました。そして ウサギが しぬと、ウサギが すんでいた 竹林に、小さな おみやを つくって、かみさまとして まつたという はなしです。」とあり、兎が菟神として後の世において祀られたことが描かれている。また、いずみ書房版同様、佼成出版社版においても、物語冒頭において大水によって沖ノ島に流される場面が描かれている。

永岡書店版は「⑪ヤガミヒメによるオオナムチ（オオクニヌシ）との婚姻宣言」「⑫八十神によるオオナムチ（オオクニヌシ）への迫害」以外はすべて原典同様に物語が展開しており、いずみ書房版や文芸社版、佼成出版社のような独自の改変も見られない。なお、永岡書店版においては、「⑩兎による予言」の後、「⑪ヤガミヒメによるオオナムチ（オオクニヌシ）との婚姻宣言」の場面描写はなく、「白うさぎの ことばどおりに、やがてオオクニヌシは ヤガミヒメと けっこんしました。そして地上の さまざまな くにを すべて おさめる、りっぱな 神さまに なりました。」との記述によって締めくくられている。

あかね書房版は、小学館版同様、「①オオナムチ（オ

オクニヌシ)・八十神の登場」から「⑫八十神によるオオナムチ(オオクニヌシ)への迫害」に至るまで、すべて原典同様に物語が展開しており、また、「日本の神話」シリーズ全6巻のうち第4巻であることから、第3巻である『やまたのおろち』を承け、冒頭、「あらくれもので聞こえた須佐之男の命の子孫にもこよなく気立てのよい神がいた。」という一文によって物語が始まっている。さらに、物語の結末部分の「こうして大国主の命は出雲の国をあとにすると、黄泉の国へのながく、はるかな旅路をたどるのであった。」との一文によって、第5巻である『スサノオとオオクニヌシ』へと物語が続いていくことが示されている。

以上をまとめると以下の通りとなる。原典の物語展開を最も忠実に再現しているのは小学館版およびあかね書房版であり、「⑪ヤガミヒメによるオオナムチ(オオクニヌシ)との婚姻宣言」「⑫八十神によるオオナムチ(オオクニヌシ)への迫害」以外はすべて描かれている永岡書店版がこれに次ぐものと評価できる。ヤガミヒメと兎を同一視している点以外は、いづみ書房版も原典と同様の順序で物語が展開している。文芸社版はいづみ書房版と同じく、兎によるヤガミヒメへの注進という原典には存在しない描写があることに加え、オオナムチ(オオクニヌシ)でなく兎を中心とした物語展開とするために場面の位置が原典とは大きく異なっている。金の星社版および佼成出版社版は文芸社版以上に兎を中心とした物語としての色合いが濃く、オオナムチ(オオクニヌシ)についての描写が主である「①オオナムチ(オオクニヌシ)・八十神の登場」「②旅の目的(ヤガミヒメとの結婚)の提示」「③八十神による従者のようなオオナムチ(オオクニヌシ)の扱い」の3場面が削除されており、かつ、神々の旅の目的であるヤガミヒメとの婚姻についても一切描写されていない。特に校正出版社版は結末部分に白兎神社の成立が描かれており、原典から最も離れた再話であると言えるだろう。

<観点3 登場人物の個性や心理の起伏>

最後に、登場人物の個性や心理の起伏に関する描写を比較する。各作品の本文より、登場人物の個性や心理の起伏に関連する描写として登場人物の外見・内面・言動に関する記述を抜き出し、整理すると表5の通りとなる。

小学館版は、オオナムチ(オオクニヌシ)を慈悲深く、容姿端麗な人物として描いている。また、本文において記述はないが、物語冒頭から兎の回復に至るまでのオオナムチ(オオクニヌシ)は額の中央で髪を結っており、体つきも細く、表情には幼さが残る少年として描画されている。その後、兎による予言の場面において髪型は角

髪へ、体つきはたくましく、ひげをたくわえた青年の姿へと変貌を遂げている⁸。八十神については、①・④の記述からは意地の悪さが窺え、②・③の記述からは尊大さが、⑤の記述からは気性の激しさが感じられる。ヤガミヒメについては外見の美しさが①・②と繰り返し描写されており、③の記述にある毅然とした態度からは誇り高さや意志の強さが感じられる。兎については、思い上がった様子を感じられ、ワニも同様に、高慢な自信家として描かれている。

いづみ書房版のオオナムチ(オオクニヌシ)は、聡明で優しく、温かな人柄の人物として描写されている。一方、④の記述において、兎に同情しつつもその非を指摘し、悔い改めるよう諭していることから、単に優しいだけの人物ではなく、理性的で公正な人格者として描写されていることがわかる。八十神については、①・③・④・⑦の記述から攻撃的で不遜な様子を感じられ、⑤・⑥の記述から意地悪く卑劣な性格が見て取れる。兎については、①から④の記述において一時は思い上がったものの、⑤での後悔と改心を経た後に、最終的に⑥の記述において素直で謙虚な様子が描かれている。ワニについては、①の記述から気性の荒さが、②・③の記述から高慢で自信家な様子を感じられる。なお、いづみ書房版におけるワニは鮫ではなく爬虫類の鱈である。ヤガミヒメについては、①で外見の美しさが述べられ、②でさらに色の白さの描写が加わっている。また、③の「にっこりわらって」や④の「やさしく ほほえんでいました」との描写にあるように、外見だけでなく内面の穏やかさや温かさが感じ取れる。

文芸社版は、オオナムチ(オオクニヌシ)について①・⑤と繰り返し「やせっぽち」と形容している。一方、②の兎への優しい問いかけや④の無欲な様子、兎に関する描写の②にある「すこしお人好しの神様」との記述などから、若く、頼りなげに見えるが優しく善良な人物として描かれていることがわかる。八十神については意地悪で傲慢な人物として描写されており、特に①の「いじわるそうに 笑って」「白うさぎの ことなど すっかり わすれて しまいました。」との記述によって、無慈悲で非道な面が示されている。兎については、他の作品の多くがオオナムチ(オオクニヌシ)に対し感謝とともに崇敬の念を抱いている描写が認められるのに対し、文芸社版の兎は、②の記述からオオナムチ(オオクニヌシ)を敬いつつも助け、導こうとするかのような心情が窺える。ワニについては文芸社版においては個性や心理の起伏が窺える記述は認められなかった。なお、いづみ書房版同様、文芸社版におけるワニは鮫ではなく爬虫類の鱈である。ヤガミヒメについては小学館版同様、②の記述によって、自身の意志を主張する強さを持った人物

表5 各社「いなばのしろうさぎ」本文における人物描写

出版社	登場人物	外見・内面・言動に関する記述を通じた人物描写
小学館	オオナムチ (オオクニヌシ)	①うさぎに気がついたオオナムチは、気のどくに思っけて声をかけました。(地の文) ②うさぎの話聞いたオオナムチは、心からかわいそうに思いました。(地の文) ③オオナムチはもとのうわしい男になって、元気に歩きまわりました。(地の文)
	八十神	①兄神たちは、わかいオオナムチにいつも意地悪をしていました。(地の文) ②どの兄神も、自分こそがふさわしいと思っけてゆずりません。(地の文) ③このときも、弟のオオナムチにつらくあたります。旅の荷物を入れた袋をかつがせ、家来として連れて行ったのでした。(地の文) ④けれども、これは意地悪だったのです。(地の文) ⑤おおぜいの兄神は、くやしくてくやしくて、はらわたがにえくりかえりました。(地の文)
	ヤガミヒメ	①稲羽の国の美しいおひめさま (地の文) ②うわさどおりの美しさでした。(地の文) ③「わたくしは、あなたがた兄神のこゝばを聞きたくありません。わたくしが好きなのは、オオナムチの神です。」(神々への言葉)
	兎	①わたしは頭のいい自分が得意でしかたありませんでした。(兎の回想場面での地の文) ②「おまえたちは、わたしにまんまとだまされたのさ。」(ワニへの発言)
	ワニ	①サメは、数の多さをじまんにしていたので、(兎の回想場面での地の文) ②「サメのほうが多くてりっぱに決まっているさ。」(兎への発言) ③「いいとも、ぜったい負けるもんか。」(兎への発言)
いずみ書房	オオナムチ (オオクニヌシ)	①だれよりも ちえがあり、そのうえ、こころの やさしい ひとでした。(地の文) ②おおくにぬしのみことも にいさんの かみさまたちも、<ぜひ、やかみひめを じぶんの およめさんに したいものだ。>と かんがえていました。(地の文) ③「それは かわいそうに……わるい いたずらを されたものだ。」(兎への発言) ④「なるほど、それでは おまえが わるいな。これから にどと わるさを しない、というのなら、わたしが もとどおりの からだに なおしてあげよう。」(兎への発言) ⑤みことは、やさしく うなずきました。(地の文) ⑥みことは うれしそうに うなずくと、(地の文)
	八十神	①にいさんたちは、しゃくに さわって なりません。それで、みことを いじめてばかり いました。(地の文) ②おおくにぬしのみことも にいさんの かみさまたちも、<ぜひ、やかみひめを じぶんの およめさんに したいものだ。>と かんがえていました。(地の文) ③それから おおくにぬしのみことに、「おまえは いちばん としたなのだから、これを かついで いけ！」と いったけました。(地の文) ④にいさんたちは これを みると、おもしろそうに わらいながら たずねました。(地の文) ⑤「それは かわいそうに。」(兎への発言) ⑥にいさんたちの なかで、いちばん いたずらずきな かみさまが いいました。(地の文) ⑦「ずいぶん おそかったではないか！ いったい、なにを していたのだ！」と いった、おこりました。(オオナムチ《オオクニヌシ》への発言・地の文)
	兎	①<ワニを だまして、うみを わたろう！> (兎の回想場面での内心の発言) ②<しめしめ、うまく いきそうだぞ。> (兎の回想場面での内心の発言) ③わたしは、こころの なかで、てを たたいて よろびました。(兎の回想場面での地の文) ④「ワニさんたち、うまく だまされたね！ きみたちの かずなんか、どうでも よかったのさ。わたしは、いなばの くへ へ かえりたかっただけなのさ！」(兎の回想場面でのワニへの発言) ⑤「はい、これからは けっして、わるいことは しません。」(オオナムチ《オオクニヌシ》への発言) ⑥うさぎは よろこんで、なんども おれいを いいました。(地の文)
	ワニ	①「なんだと？ わしらの なかまよりも おおい だと！」ワニは、おこって いいました。(兎の回想場面での兎への発言・地の文) ②「わしらは、この ひろい うみに かぞえきれないほど いるんだ。こんな ちいさな しまに いる おまえたちとは、くらべものにならないよ！」(兎の回想場面での兎への発言) ③「そんなの、かんたんさ！」(兎の回想場面での兎への発言)
	ヤガミヒメ	①やかみひめ という うつくしい おひめさまが すんでいました。(地の文) ②いろの しろい、うつくしい おひめさまです。(地の文) ③やかみひめは、にっこり わらって たちあがり、おおくにぬしのみことの まえに くと、しずかに おじぎをして いいました。「あなたのおよめさんに してください。」(地の文・オオナムチ《オオクニヌシ》への発言) ④やかみひめは、ただ だまって、やさしく ほほえんでいました。(地の文)

文芸社	オオナムチ (オオクニヌシ)	①大きなふくろを せおった、やせっぽちの 神さまでした。(地の文) ②「どうしたの？」(兎への発言) ③オオクニヌシは、いつも兄神たちに いじめられていました。今日も みんなのものにつをぜんぶ、ひとり りでせおわされて いたのです。(地の文) ④「そんなこと、考えてもみなかったな」(兎への発言) ⑤いずれ 国をお造りになる 大国主命の まだ 若くて やせっぽち だったころの お話です。(地 の文)
	八十神	①そう 言うと 神さまたちは いじわるそうに 笑って、いってしまいました。そして しばらく す ると、白うさぎの ことなど すっかり わずれて しまいました。(地の文) ②弟のオオクニヌシのことは、にもつもちとして つれてきたのでした。(地の文) ③「まさか、おまえも いくつもりじゃ ないだろうな」「ことわられるに きまっている」「やせっぽち の くせに」(オオナムチ(オオクニヌシ)への発言) ④「え—————っ」(オオナムチ(オオクニヌシ)の求婚をヤガミヒメが快諾したことへの発言)
	兎	①「ワニさんはわたしに だまされたのさ」(ワニへの発言) ②この、すこしお人好しの神さま、なんとかしてさしあげなければ。(地の文・兎の内心の発言として)
	ヤガミヒメ	①ヤガミ姫は、すべて お見通しの ようでした。(地の文) ②「わたしは、あなたたちの 言うことは 聞きません。」(八十神への発言)
金の星社	オオクニヌシ (オオクニヌシ)	①この かみさまは、こころの やさしい かみさまでした。(地の文) ②「かわいそうに。」(兎への発言) ③おおくにぬしのみことは、やさしく うさぎに いいました。(地の文) ④「これからは、うそについては いけないよ。わるいことを すれば、かならず じぶんに かえって くるからな」と、おおくにぬしのみことは やさしく いいました。(兎への発言・地の文)
	八十神	①いじわるな かみさまが とおりかかりました。(地の文) ②「おい、うさぎ、かわを はがされ、いたかろう。うみの しおみず からだを あらい、かぜに ふ かかっていると なおるぞ！」と、うそを おしえました。(兎への発言・地の文)
	兎	①もうひといきで、むこの しまに つくというとき、うさぎは おおわらいしながら いいました。(地 の文) ②「あっはっはっ……、さめくんの おばかさん！かずくらべなんて うそだよ！ぼくは こちらの し まへ わたりたかっただけさ！」(ワニへの発言) ③「ありがとうございます」うさぎは ふかく おじぎをして、いいました。(オオナムチ(オオクニ ヌシ)への発言・地の文) ④「はい、やくそくします」うさぎは こころから はんせいしました。(オオナムチ(オオクニヌシ) への発言・地の文)
	ワニ	①「いいとも、くらべっこしよう」(兎への発言) ②「よくも だましたな！こうしてやる！」(兎への発言)
俊成出版社	オオクニヌシ (オオクニヌシ)	①「これは、かわいそうな。どうしたんだ？」(兎への発言) ②オオクニヌシノミコトは、にいさんたちの にもつを ぜんぶ もたされているので、おくれて ある いていたのです。(地の文) ③いたくて ないている ウサギの はなしを きくと、オオクニヌシノミコトは、やさしく いいまし た。(地の文) ④「サメたちを だましたのだから、おまえも わるい。でも、もう じゅうぶん くるしんだのだから、 ゆるされてもいいだろう」(兎への発言) ⑤「その からだを、うみの 水ではなく、川の 水で きれいに あらうんだ。それから……」と、 しんせつに、なおしかたを おしえてやりました。(兎への発言・地の文) ⑥うさぎは やさしいかみさまに おしえられたとおり、(地の文)
	八十神	①そこへ、たびを している わかい かみさまたちが、とおりがかりました。(地の文) ②わかい かみさまたちは、ウサギを からかって、うそを いったのです。(地の文)
	兎	①そして ぴょんと たかく とびあがると、わらいながら、「サメどんたち、うみの 上を わたし てくれて ありがとうよ。だれが かずくらべなんか、するものか」と いいすて、みさきの いわ へ とびうつろうと しました。(ワニへの発言・地の文)
	ワニ	①「それは、おもしろい。わたしの なかまは、よべば いくらでも くるぞ。わたしの ほうが、おほ いさ。——で、どうやって、くらべるんだい？」(兎への発言) ②「よし。やろう、やろう」にっこり わらって、なかまたちを よびに いきました。(兎への発言・ 地の文) ③おこったのは、サメたちです。「おれたちを だましたのか!？」(地の文・兎への発言)

永岡書店	オオクニヌシ (オオクニヌシ)	①でも やさしい オオクニヌシは、もんく ひとつ いいません。(地の文) ②「おお…！かわいそうに。」オオクニヌシは かけよって、うさぎを だきおこしました。(兎への発言・地の文) ③うさぎの ことばに、オオクニヌシは やさしく ほほえみました。(地の文) ④オオクニヌシは にっこりしました。(地の文) ⑤オオクニヌシも にっこりしました。(地の文) ⑥「よしよし。もう みんなを だましたりしては いけないよ。」(兎への発言) ⑦そして 地上の さまざまな くにを すべて おさめる、りっぱな 神さまに なりました。(地の文)
	八十神	①おかあさんの ちがう おにいさんたちが、じぶんたちの にもつを ぜんぶ オオクニヌシに もたせたのでした。(地の文) ②いじわるな おにいさんたちは、わらいながら いいました。「やあ、赤はだかの うさぎだぞ！」「なんて みっともない すがただ！」(地の文。兎への発言) ③それを きいた おにいさんたちは、ますます わらいこらげました。「おい、からかってやろうぜ。」「そりゃあ いい。ちょうど たいくつ していたところだ。」(地の文・八十神同士の会話)
	兎	①ピョン ピョン、はねるのが じまんの うさぎは、まい日 しまじゅうを とびはねて いました。(地の文) ②「そこで サメを だますことに したのです。」(オオナムチ(オオクニヌシ)への発言) ③うさぎは サメに むかって、とくいそうに いいました。(地の文) ④うさぎは とくいで なりません。(地の文) ⑤あと一びきで かいがんに つくという とき、サメにむかって、大わらいしながら となりました。「やーい！おまえたちは だまされたんだよ！ほんとうは けたのみさきに わたりたかっただけなのさ！」(地の文・ワニへの発言) ⑥「サメを だますなんて いけないことでした。しょうじきに たのめば うみを わたらせてくれたかも しれない…。」(オオナムチ(オオクニヌシ)への発言)
	ワニ	①「なあに、サメの かずの ほうが おおいに きまっているさ。」(兎への発言) ②「よくも だましたな！」「つかまえてしまえ！」サメたちは かんかん。(兎への発言・地の文)
	ヤガミヒメ	①おにいさんたちは、いなばのくにの ごてんに すむ うつくしい ヤガミヒメに、けっこんの もう しこみを するために、(地の文)
あかね書房	オオナムチ (オオクニヌシ)	①あらくれもので聞こえた素佐之男の命の子孫にもこよなく気立てのよい神がいた。(地の文) ②命は、兄弟たちの荷を背負わされると重い足どりでしたがうのであった。 ③「おや、うさぎ。どうしたのだ」命は足をとめおだやかな声でたずねた。(兎への発言・地の文) ④「なんとむごいことだ」大国主はまゆをひそめた。(兎への発言・地の文) ⑤するとどうだろう、命は前にもましてりりしいすがたでよみがえると、力みなぎるようすであたりをあるきはじめてたのである。(地の文)
	八十神	①兄弟たちはそれに目をとめるとからかいはんぶん(地の文) ②そうなると八十神たちのはらの虫がおさまらぬ。にくい大国主のいのちをうばおうとはかりごとをめぐらした。(地の文) ③「しそんじょうものならいのちはないものと思え」(オオナムチ(オオクニヌシ)への発言) ④兄弟たちはますおもしろくない。(地の文) ⑤それでもなお兄弟たちは大国主のいのちをあくことなくつけねらった。(地の文)
	兎	①あるとき、海のさめたちをたぶらかしてりくへわたってやろうと思いついたのでございます。(オオナムチ(オオクニヌシ)への発言) ②ところがさいごの一尾というところでわたくしはうれしさのあまり口走ってしまったのでございます。(オオナムチ(オオクニヌシ)への発言) ③『やいやい、だまされたな。わたしは海をわたりたかっただけなのさ』(兎の回想場面でのワニへの発言)
	ワニ	①はらをたてたさめはあつというまにおそいかかってまいりますと (兎の回想場面での地の文)
	ヤガミヒメ	①「わたくしにはあなたがたのことばは耳に入りませぬ。大国主の命さまのみもとに嫁ぐつもりです」(八十神への発言)

として描かれている。

金の星社版は、オオナムチ(オオクニヌシ)については①・③・④と繰り返し優しいと形容しつつ、②において慈悲深さを、④の発言において公明さを描いている。八十神については意地悪な人物像が端的に示されており、兎については①の「おおわらい」や②の「あっはっ

は……」との記述から、思い上がった様子が描かれている反面、③の「ふかく おじぎをして」や④の「こころから はんせいしました」との記述からは、深い反省とともに改心することのできる素直な人物像が見て取れる。ワニについては特筆すべき描写は見られない。

佼成出版社版は、オオナムチ(オオクニヌシ)につい

て③・⑥において「優しい」と形容し、⑤において「親切」と形容している。また、①の「かわいそうな」との発言から、慈悲深い人柄が窺える。一方で④の「サメたちを だましたのだから、おまえも わるい。」との発言を見るに、単に優しく親切なだけでなく、公正で道徳的な面を有していることがわかる。八十神については他作品のように「いじわる」との形容はなかったものの、②に「からかって」とあることから、兎への助言が思いやりから発したものでないことがわかる。兎については、①の「わらいながら」「いいすてて」といった記述から、思い上がりとワニへの嘲りが感じられる。一方のワニはというと、①・②の記述から、無邪気に数比べを楽しむ様子が窺え、そこには兎への蔑みや尊大さはないように見える。

永岡書店版のオオナムチ（オオクニヌシ）は③・④・⑤とあるように、表情の豊かさが特徴的である。また、②の兎を抱き起こすという行動は他の作品にはない描写である。⑥の兎への戒めの言葉もあくまで優しく、慈悲に満ちた表現であり、①に見られる辛抱強さと併せ、⑦に記述があるように、統治者にふさわしい人格を有していることが述べられている。八十神については、①での行動や②の「いじわる」との形容、そして③の「わらいころげ」との描写や「からかってやろうぜ」との発言により、意地悪く高圧的で、他者を嘲弄することを楽しむ悪意ある人物として描かれている。兎については、①の「はねるのが じまん」、③・④の「とくい」、⑤の「大わらいしながら どりました」との表現から、高慢で不遜な様子が感じられるものの、⑥の発言はオオナムチ（オオクニヌシ）から諭されてのものではなく兎が自ら至った反省の弁であり、強い後悔と素直な心根を感じさせるものである。ワニについては特筆すべき描写は見られず、ヤガミヒメについても外見の美しさについての描写が1箇所確認できるのみであった。

あかね書房版のオオナムチ（オオクニヌシ）は①の「気立てのよい」③の「おだやかな」との形容や④の「なんとむごいことだ」との発言から、温厚で優しく、慈悲深い人物であることが窺える。また、⑤の「りりしい」との記述から、外見も優れていることがわかる。八十神については、①からは他者に対する侮りが窺え、②・③・④からは気性の激しさと狭量さが、⑤からは執念深さを感じられる。兎については①・③の記述から高慢さと計算高さを感じられる一方、②の「うれしさのあまり口走ってしまった」との記述から、軽率さも併せ持っていることがわかる。なお、あかね書房版の兎は唯一体毛が茶色に描画されている。ワニについては特筆すべきことはなく、ヤガミヒメについては八十神に対する①の発言から、気高く芯の強い存在として描写されていることが窺

える。

以上、作品ごとの再話作品としての特徴を探るべく、「登場人物の呼称と地名」「物語展開」「登場人物の個性や心理の起伏」の3つの観点において比較を行ったが、総括すると以下の通りとなる。

小学館版「いなばのしろさぎ」はほとんどの登場人物の呼称とすべての地名が原典の通り示されており、物語展開も原典に忠実なものとなっている。登場人物の描写においても原文を尊重し、過度な修辭は加えられていないが、オオナムチ（オオクニヌシ）の成長を本文中には記さず、髪型や体つき、顔つきの変化を描画で表現している点も他の6作品には見られない特長であると言える。小学館版の本文に出現しなかった「八十神」「ワニ」についても、幼児・児童に理解しやすいよう表現を改めたものであると考えられる。子どもが手に取り、親しむことに適したものとなるよう、平易な語彙や表現を使用しつつ、可能な限り大きな改変は避け、原典の魅力をそのままに残そうとする配慮が窺える再話である。

あかね書房版「いなばのしろさぎ」も小学館版同様、原典を忠実に再現しようとする意図が感じられるが、如何せん使用されている漢字や語彙、表現は幼児や低学年の児童にとっては難解なものが多く、現行の国語科教科書における「いなばのしろさぎ」の導入として就学前に親しむには適さないと考えられる。

永岡書店版「いなばのしろさぎ」は、オオナムチ（オオクニヌシ）や八十神、兎の個性や心理の起伏に関し、原典には存在しない描写も多く加えられてはいるものの、物語の展開や登場人物の呼称と地名の記述においては原文と近いものが目指されており、小学館版およびあかね書房版に次いで原典に忠実であると評価できるだろう。

いづみ書房版「いなばのしろさぎ」も、永岡書店版に劣らず原典に忠実な物語展開となっており、登場人物の呼称や地名も大部分が原典通り示されているが、大水によって淀岐島へ流された兎が望郷の思いからワニを騙そうと考えたとしている点、そして兎とヤガミヒメを同一視している点において、永岡書店版や他作品とは異なる独特の再話作品として成立していると言えるだろう。

文芸社版「いなばのしろさぎ」も同様に、オオナムチ（オオクニヌシ）によって救われた兎がヤガミヒメに八十神、オオナムチ（オオクニヌシ）のことを注進するという独自の物語展開が加えられており、また、オオナムチ（オオクニヌシ）ではなく兎を中心とした物語として大幅に構成を改変している。また、オオナムチ（オオクニヌシ）の外見に対する「やせっぽち」という形容や兎による「お人好し」との表現は、原典におけるオオナムチ（オオクニヌシ）の人物像とはそぐわない、独自の

描写である。

残る金の星社と佼成出版社版は、文芸社版同様、兎を中心とした再話として物語展開を再構成するとともに、冒頭および結末の箇所を大幅に削っている。佼成出版社版は『古事記』原典には記述のない、後の世における白兎神社の成立が結末として描かれているが、金の星社版は、大きな改変や独自の描写はなく、兎のオオナムチ(オオクニヌシ)への感謝の言葉によって物語が閉じられている。原典の記述からは離れてはいるが、両者ともに就学前の幼児が楽しむに適した再話であると評価できると言えるだろう。

3. おわりに

以上、「いなばのしろうさぎ」を題材とする絵本7作品の再話作品としての特徴について述べたが、今回対象とした絵本7作品のうち6作品が2000年代に発行されており、さらにそのうちの4作品が2010年以降の発行である。現行の小学校国語教科書が2010年に全面実施となったこととの関連を川俣(2019)において指摘したが、2020年度より全面実施となる新教科書に引き続き現行教科書と同じく「いなばのしろうさぎ」が採用される可能性は高く、そうなればさらに「いなばのしろうさぎ」を題材とする絵本の刊行や、「いなばのしろうさぎ」以外の日本神話を題材とする絵本の刊行も活発となるだろう。今後も継続して「いなばのしろうさぎ」をはじめとする絵本の刊行状況を見守りつつ、改めて別の機会に同様の対照比較を行うこととする。

注

- 1 神志野隆光・山口佳紀(1997)『古事記』(新編日本古典文学全集 1)小学館を底本とした。本稿においても同様。
- 2 現在入手可能な出版物を検索することのできるWebサイト「Books.or.jp」で「いなばのしろうさぎ」/「しろうさぎ」/「おおくにぬし」でキーワード検索を行った結果の中から、因幡之素菟説話を題材とした絵本のみを抽出した(国造りなどの因幡之素菟説話以外のオオクニヌシに関する説話はこの表からは除外した)。一般書、そして絵本であってもゲームブックの類は除外した。
- 3 特に幼児期の子どもを対象とした絵本の場合、通常は全文をひらがな表記とする。
- 4 カタカナ表記か漢字表記、あるいは漢字仮名交じりの表記かの違いはあるが、本稿ではその異同については取り立てないこととする。以下同様。
- 5 物語冒頭、「やまたのおろちを退治した出雲の国の神、スサノオの子孫にあたる、オオクニヌシのお話です。オオクニヌシは、わかいころオオナムチと呼ばれていました。」との2文において2箇所「オオクニヌシ」の呼称が出現するが、以降、物語末尾である「このあとオオナムチは、根の国堅州の国で、オオクニヌシになる力を手に入れるのです。けれども、それには、さまざまな危険が待っているのです。」の2文に至るまで、

一貫して「オオナムチ」の呼称が採られている。

⁶ 『塵袋』巻十には洪水のため岐波島に流された年老いた兎についての記述がある。ワニを騙し故郷に帰ろうとするもそれが露見し、着物も毛も剥ぎ取られてしまったところをオオナムチ(オオクニヌシ)によって救われたと記されているが、八十神とヤガミヒメについての記述は認められない。

⁷ 他の絵本は同様の場面を少ないものは2頁(見開きで1場面)、多いものでも6頁(見開きで3場面)で描写している。

⁸ 監修者三浦祐之による巻末の解説文には「うさぎと出会ったときのオオナムチは、ひたいの上で髪を結んでいます。これは『ひさご花』という少年の髪型です。それが、うさぎを助けることによって成長し、『角髪』という一人前の男の髪型に変わります。」と記されている。

⁹ あかね書房版の折込付録には筆者の船崎克彦による解説として「これまでの、古事記を素材にした児童書、絵本のほとんど全てが白いうさぎを描いている為に固定観念ができあがってしまったのですが、古事記原文を読んで戴ければ納得されると思いますが其処には『此稲羽素菟者也』つまり素菟と表記されているのみです。ものの本によっては素を白色と定義している例もないではありませんが、『古事記伝』を著した本居宣長はこの点について『さて此の菟の白なりしことは、いささか心得ぬ書きざまなり(中略)素もしくは裸の義には非じか、若し然もあらば、志呂とは訓むまじく、異訓ありなむ』と誌しており、つまりしろうさぎとは素——素裸の素、裸(あかはだか)のうさぎの意であって、となると素をシロと読むこと自体にも疑義ありと述べているのです。」と記されており、その上で、日本に生息するノウサギのすべての種が冬場以外は茶褐色であること、そして兎が傷を癒したガマの花が夏であることを併せて考えた結果、兎の体毛を茶色にしたと述べられている。

【参考】

- 三浦祐之 他(2016)『日本の神話 古事記えほん【四】いなばの白うさぎ～オオナムチとヤガミヒメ～』小学館
- 秋晴二 他(2014)『改訂新版 せかい童話図書館 9 いなばのしろうさぎ』いずみ書房
- 伊達恵美子(2012)『因幡の白うさぎ』文芸社
- いもとようこ(2010)『いなばのしろうさぎ』金の星社
- 谷真介 他(2006)『十二支むかしむかし いなばの白うさぎ』佼成出版社
- 照沼まりえ 他(2002)『いなばの白うさぎ』永岡書店
- 赤羽末吉 他(1995)『日本の神話 第四巻 いなばのしろうさぎ』あかね書房
- 神志野隆光・山口佳紀(1997)『古事記』(新編日本古典文学全集 1)小学館
- 川俣沙織(2019)「小学校国語教科書における日本神話について」中村学園大学発達支援センター研究紀要第10号 pp. 25-37
- 谷本由美(2011)「二〇一一年度小学校教科書の「いなばのしろうさぎ」：多義性の視点から日本神話再登場のあり方を考える」児童文学研究第44号 pp. 15-26
- 谷本由美(2012)「児童向け『いなばのしろうさぎ』における挿絵の変遷：『和邇』の描かれ方に表れた古事記解釈」児童文学研究第45号 pp. 33-45
- 小山祥子(2015)「昔話絵本の再話と描画に関する比較研究—「かちかちやま」の場合—」駒沢女子短期大学研究紀要第48号 pp. 9-18
- 石井悠加(2017)「幼児向け昔話の特徴について—原典との比較—」淑徳大学短期大学部研究紀要第57号 pp. 167-174

Books.or.jp (Search Engine for Japanese Books) <http://www.books.or.jp/>